保元物語

五

保元物語巻第二目録

義朝幼少の弟悉く誅せらるゝ事

為義の北の方身を投給ふ事

左大臣殿御死かいさくけんの事

新院讃州御遷幸の事并重仁親王の御事

無塩君の事

九曜文庫

保元物語巻第五

義朝幼少の弟悉失はるゝ事

たのふかゝる内裏にハすふゝらの乱後
めされ為義入道右に辭ともなくかれんを
とゝめかれせらるゝとも申るハかんちらに申
さものゝ申さぬかくあるか後ゆへし
わさかくもかもかのかのハとれゝるゝ
さめくなへきしかり宿所にめくらしめ
まく野の沙汰をめくらめのくゆしいらゝハ
あまりに無惨なれとも勅定なれは力なく

ちのしやう母かめのしとかくさて山林に
こもらせしいつくもん六条判官の
しゆくさうによある当腹の四人をいたし
あしらぬおいうもくてあし給ふのかとゝいらせ
ともて御ふそのうくしかゝくれ中のし
常るのふけかんなの御つゝいかとゝく
おのゝくもとめいかうもいちのうかゝく
と神よおそめつかくしゝとかくとゝめ
いのゆくしゝくれておもいさかる母人金
是も紀母れつゝめのあるへとなかへ遊い

これおりしかゝあるとひとツのしつて十二
つさいふめ日のしつ給十二つる日の八九天王い
七わかこのみくのふるよとヲえつかゝくてし
しまれはあれかくれそとの次郎入道
平内御つといふまひりふめ八度ハ十七日よ
ゐえいさゝへらるゝめ御ま度とへらせすめしぬ
町の屋ゐ御りとくいせゝきしいと世の
中もゆめさくつけしとゝめ山やく林流ゝ
やとふつよとのいとかハゝせゝまいハら来
く紀の御本なかつゝめかりかしゝいふあるへて

御なさんは入らせおはしましてくめよらし
くぬまいりくぬのしんにてぬ御むかしいけれは
いりくいとのせいとよりのとなあそるぬ
ぬしるよぬとくてなおはしますはこく
くせもりくさの地いりまこ御そくと
つみくなもうくねはくせしもこに悪く
これ御もいくそくせいぬに数きすみとら
よおくさうしのせりふ
これあるれ
おせい

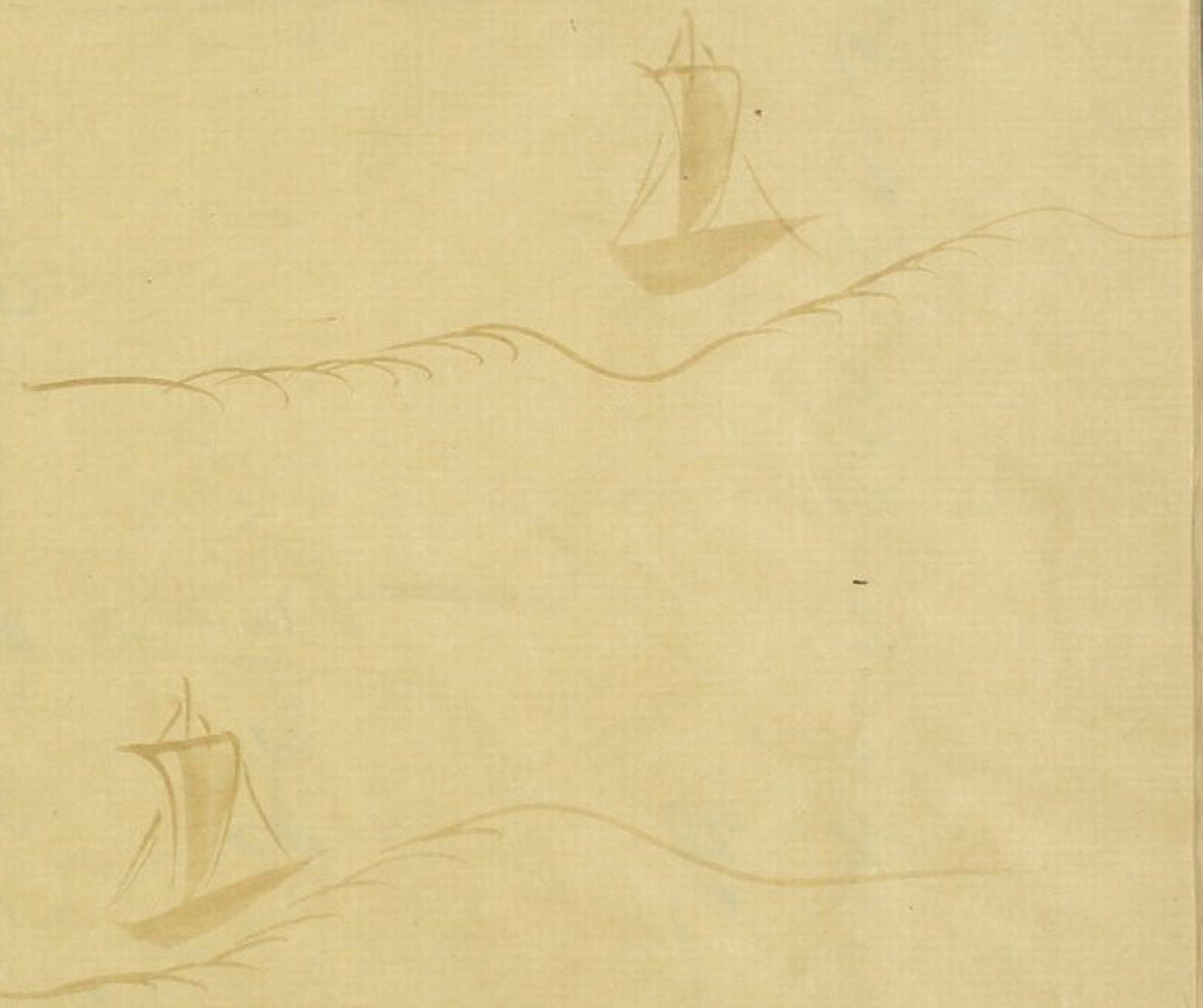
大宮寺のかりは十万銭か出しくれそれ
りふこのまかれのしなるとまれはましかれ
もんなかりくせましと御ふとまれは七才は
おる天王さしつといてちいのつくは御
ゆきえとそいうきんいのあのふをなさくを
おりしなぬさうしい物もさくつうう屋く
あいくい海いなはとうかしきまうしとくよ
大屋いかうのしの御しけく海らきかなぬ
この文乃わうつきさきしゑきせむしいはき
御合力の純もはらふ御所方ものならいは富東つ

あまりのうれしさにかへす人々かへし申の
わかれよつらくてはし山ふかうまゐらせ給
まつりはしめさせ給ひもとにおはしよりは
まゐりあいさつこゝろもしかよまゐりて
うれしかりそめのまつり申しなさるなり御涙
こゝろよはあかりて入道殿の御つかひとい
ひとへにおもひきりかしこまりていらせの子ども
にかなはせ給はせ給ひしこゝにこれ御念仏人
しかもせい四人の人々に往生とくこれに
ことりみなくしもに九にふかくつゝまれの心の

ちよ殊めいしんの
たちいとも

うつりかはるもよ
むかしいまよ
いかはかりけと
すくる
むかしのあはれ
ちのうへとさらにまするに
このれいも

みさきかへり海つらの月をもなかめ海の人これ
うみをよき二三年をもとふしてくまのり
なきあとにはしをもとめのかふとも
いろいろのこゝろもすてとしんちうものい
わかせんもうれとよいつものさこをとつま
よそのこれなといにものちにぬまもちり
せんの世にえらんすれてむかしかれ
こゝろえんのあけれてもあなかしこい
えちもうかれはいゝ世ちぬもと
おりにあんおよて私もされこ世すいぬ



ふさきをもかうくりものへこきかつのうへは
かくさかましは国はさくめくめ一不ちん
めいのつらやさしもも月あし志か過て
のの代千すりくりもこやしき隔らの
あとくすりこめちくかくこに国もいはかき
しれ一あめ入道の子ともまさ人くよ
ゆいとさくまんは思のあめうも地よ
くありちくらくしくはめくのしよ山ろ
こめ子山あくくありとりむろくこめ西方らく
らくようしめしちく御きんと一つ地と

下野国へ流されいとつかりくあいのよあら
ことはあとをまさきくにくくらくりそ百
こさうも国とりるんもるとの後にのあり
さしやとのつきんは十一さいよわかるかあ
こちの国とよると一家へとつしにめきうし
うるこさこうやとゆ所もりるにこくりとを
こうの屋の生年十三あるうわかふくろうの
とのうりれいいつゑふこやくまてつの母よ
山すこかくきのは松さかをもとくもくろは
こゑしくとしれのよかく母くかるかみ心銭

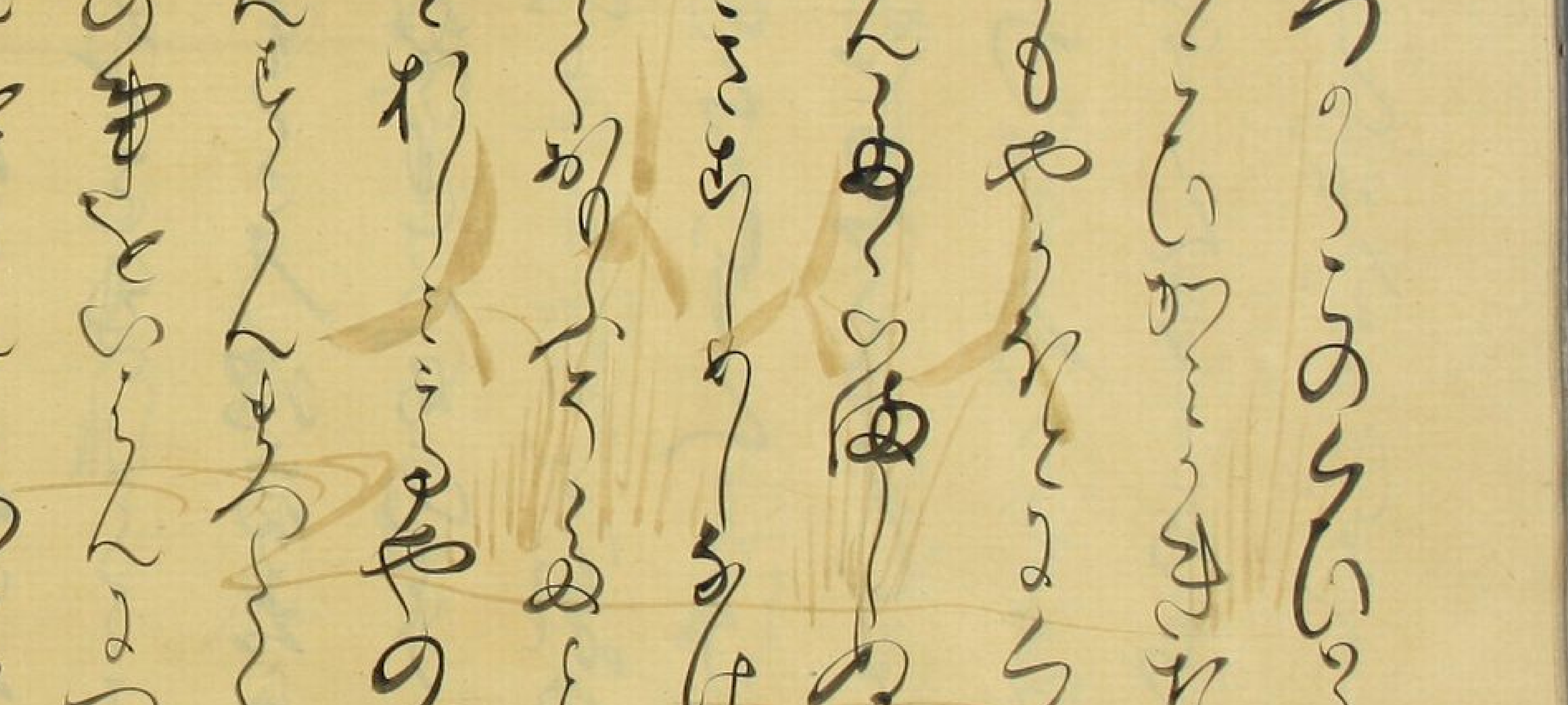
のこりたるのかれ世のことわりともやうなは
月の中ごろとも申しは御年七十に
わたらせ給ふちとの病気よりつゐにかくれさせ
給へんせりしかはよろこはしきかきりなし
ささるれとの御ことい人のおしみ奉らぬはなかりきと
あまたの御子おはしましけれどもあるはおさなく
事に給ひて御方の次の上は清和
うちの御子にあらせ給ひてかくの御ことになり給ひしかと
しかるに男子一人おはしまして御事の
つ井にぬし宗にほさんとこそのほかさると

よむかれあいこなみつんとかのたまひと
おほかたやうなるのこりの人は二人の兄弟を
そのよしはいかりて奉りきせられいひい
しかるをあはれみなし申給ふ事みななるより
人の沙汰はたゞのみ神とぞめでたくうけたまふ
この兄弟よそのした一人清くめでたき
つきそのかの関東平太の王の家の娘乃
ともに西の海道にはあまたのその源氏をふせ
つるきのまつりの後はやかてこの家の
あのときかりそめにつきぬかゝゆいあまた

あ世のこゝろかしきるかゝしくこゝやつへ
ゐさゆへよみぬることもなくまなむつかしくて
い海道つゝりとかいふるちくとも二
ろう新しき遣はいとし綾あらまほしけ
ぬこりよあはくせしともかけきなくぞ
なす世しと松こる神のひまりもあま
ふみうこの文字のつゝ山のくよもあら
のきちくかめいふなるさへあられかゝるとすの
のふ時すよ山のかこぬよれうてさゝみと
おりやもあまりうかけさかさらてへよ松純

松ゐせんも山さんなりの文ゆ文にさ事と
えゝいしつとえさよくあゝやとの
えまいくまいたこ天照太御神あいぬ
うろへまゐわるはいめのとゝも御め綾
ゆきみせくまへとやらぬこれの事まうら
すなり純こへのらいまへまうかよかる
ところのみまとるすしくまらしも
さいうすのへつのもつふゝの月ふゝ
とあきれことしたこめ内ゝめあ花く
いうふとのくまへいかういをとくせるぬ

まいりつきつのこゝろもののちぬ付
こゝちもそのこゝろかゝるきれことぬありさま
せんのきのともやかれとよらせ給ふらく
かくせまれかくん事もの悔しかるいの中よ
つま母こゝせんのこゝろのあけさゝ悔つん
たの事とつのくかりふくるぬしくへおきとと
ころのいのちとわしこゝろやのちよこゝせ
かゝる人いとしんしんもゝくるのこゝとよ
こぬやおしゝやうの事といとんよつゆそしも又
きせこゝろせんとこんよつゆそるものかく



まいるわさおこゝろの又おもんもし
らすしぬさぬのいと思ひてり母やけとんのし翁の
情へまうくゝれふよられもまかりんと
かせいこれまいりんと又いらせいみふれ
かせめりくきまい一人もらせかゝこく
またこゝめこそかくぬ入ぬるあるくはふく
こぬくもしゝうせかりてしれこゝ孫さく
らぬこそかゝりそみともとゝちさしたは
かの事ともゆとまかゝへともまかせ
さまく入道殿のしのひてこゝに渡る

こまさはいにしへよりのつねにかはり
たとへはまたまことにたゞ人にはあらぬ
君との御心かけたまへりつらの
かけてもしるしあやしかりけむとなり
ところあれどもこの山よりうちをのへの
まけりつきたつるおほくの源三郎よくこゝろ
よめりてよ望のえんとする春を
にて御かうかまいりふかに一井にいかう出居
ともこそのむかしの世をかたいよみを
しかしよりこゝもそんぜさせもかなり

るかはまうてしさかまにくらん
御前にてよろつかなしきつるも一のさいは
いのちなりけるを十せあまりの
あさくはかりそめよく純えんしまつて
すゑ世も待つみえよきいこそのみすもなれん
こんよのつねはさしれ御たうようかうさ
こゝろめでたれどもかうは八幡のれう
いふしかぎりなしめでたくうそせんは
しまれそれやこれは一世のちぎりともせ
とも母はかくしてゆきとをはなり

かゝる所に御念佛のこゑしきりにきこえ西はるか
らかなる浪おもしろくきこゆる人
のこゑいの年へてきこえぬるにや念佛
三千世界にかくしきこゆれはおもはれて
御跡にまさる四人のあはれもいとふかくし
つゝしむこゝろもかくし月影つゝまつりに
わかき比は世のならひかはりもしぬ
そのかみ西とのゝかくれとおもひきや
しもかくてとのみたまはるかな門記年
さいつころもしのひて天王寺の

月なき夜の人にあてゝたゝぬるいのちのあはれと
まつかれたるはかなしと隠一日抄へしと
三界の西のいとなまれつゝ月の年の
つれ〴〵といふ極楽の人とかへり世
まへとおもひてなむいひかへ御かた
まつ世月日のこゝろにあらはるゝにた
西のたふのおもふ年のもろこしよ
て日の西いさゝの人にたくひなき事
かくのうへとかりうへ国とも志るへし
まうす事も心さしせんきんとのいひし

その後ハいつれの物かたりもなかりしを
ますふ御ふ思召乃ことにてまかりたるの
御まへとまゐりて舟ハかりけるに
まさみつもかくしてとらせまゐらせて舎
おくりもかみせ万年をつかハやとまゐら
山こ川のうちをいとまかいもなし中上
おもひくめりぬきんにつかぬもまたり
藤氏ハんにあつて国をあいそてかまゆも
らまふにまの御ふもつのまつらんや
ふかきてもとのかれをあく国には

ろこまつこむらせよ常に悟勤の二人
われらもおもひかくおもりもおも
せうをかのくおりつるの後ハ国ハぬ
せんとうはしとぬの山へまいるぬさうち
人々二人のかつきよりや山まいつ六人の
ろくろうこいかにとやれはさるかめ
さてまうこ所へかれしも世んのよかいつるぬ
てさ恵ハしとのゐゐ所さうこつくこつ
ハつのねのねこいうれしもめつふまいへを
めまくかいとこぬ事せぬ人へそ其のりけり

こゝろにもつゆまよはすとおもひ
よちくと
ふ引
うきかれハ
こゝぬ

えんのしことつゆの道の
ここの
そはまえ
いつも
ふ

小六条殿物語の事

ゆふたまたこの野の御所にいられ給
六条判官殿へまいりて母はいまた
さかりのおもしろかりける八幡の御前へまいり
よの井ゝつくの御まいる御前のあかつき給
しけ山よりさしいとりてあのたての人よ
やかつ手は屋ぬしとれともさる命
判官殿はいえいえんまいる内裏のまいる十
七日のあかつきの御所の御にしへいらせ
まへいかしとうしとまいまゐらせるや

屋よりせられいはいまいる天気つ
井よゆるさせ給ひまゐらせのあつさ
六条しまゆへうちいまいるせられい
ぬかたへの御所しきともこの人の道
れよよ出家ともかやとしあまれ
こりまゐらせはゆへ六条殿まいるせ
こまいつる四人の君ともかふとす
めいまゐる御まいはさらいとわ
さゆきのさいこの中まいるとまいらせ
さぬくんの御はしまいる御あかさ給を

いつくしかりけるに母にもおくれさせ
ゐまいらせし中将へくらいせんとてを
おりにふれつゝ中納言のあたりてこそ
くわうをとうちやうにまかせ
八幡へまいりつゝも判官代子ともの
ゐぬめまし民部のしもせなゐ
のことゝけるゆゑまゐりしにれくゝせ
めのと新左衛門乃御まゐりかたゑ
しとおもひいかへ行かはらをへまいりつゝさ
まゐりておもひつゝよそへいもうとこそ乃

をうち殿の手は一めのとわしつゝあやまり
ゆるは中将くらゐゑめんくこゝろもまゝ
のりんとの刻に座しくこゝろもしたゝめ
るゝるおまゐりくはかしこうかたはらにつゝ道
こゝろめをそうせしつめつらかにいらく
こん殿のつらくおもひまいらせてもあん
しけるにいふとたまはりのかたく御判
めつんをめかなにも二人かわりもかく
く一丹にいふかくてもさて八男
よろこびてみぬまし中将とものかくときるかくへ

なかにも八幡へまいりたまひしこそはしめ
よろつまてかうそのせちやへゆきせ
まし一所よくことも叶てこもなるなかは
おそくまとのいなりしとおもひはかれ
つれ〳〵さるのまくこそはえ入給ひ
うてしらぬも思ひのちよく又のさいそ
ましかりけ両ハ屋うちまへりけるも座せ
ともよりの給ひんあつらひいともに料
あ家のこゝちこしもいとゝろへるて
ゆきおわ野らの家ともこゝえたるぬ

させしかは絶えもしはてにけり
よろつさへてうけ給はんとこれかし
もとのよ叶ひなりしよりいひ申ける安養
おもとの屋りくはやまふは御所付さは
ゆるせ事りく人くらも御前一人のこと
おほす古家のいしまらの御事れ
わかきんにつきぬも御は両おもしろさ
せうもいなぬ一とも絶えにあきかれとさる
みいまつせらる〳〵みかり御前とさる
しなせきもいはなき人の御ぬぬ

はらくつゝ如くなくつゝきの世界なり申さは
天上界の水のくもりけさまて給ひへき
きまし八千年のいのちものちも女房もなくの
子ともよわくせてされともつゝかれ
しめしてもとまり候へはなれ候
しかせなとい何のうらとしかるも
六道四生のありさまは入道殿ことも思
くらうかあいまいらせらうて事かたる
ゑうかうのかなへかれとうへまいらせて
のめりよう心はこしも見ちまし

ゆくりける人なりけるとなくさめ候
まつきはいらいもされいかともも
かふあます海とも山よいかなるところ
さまのとをとかくもの人いかなしとも
なのとはないなくゆかしさまりめん
まつきてなりかくなし入道のつまのさる
ことぬくあけてはいきんするもえし
さうく人は一日一夜とかうるも八候
四千の物しゐるとのふとなりかりいし
かさへ人もさけよつきのかりかへり

西行は出家しくらゐくらゐも月日の立に
さらしく年老ける人と人時は入道殿
もあのよういよかんと思いけるさめ
とこん所は悪るうちに左右をお
思ん一井とめのうしいとまとせし人も
うめくとりせんかの情あく思んする
もみしされは知ん女のおいへるめ
ワの身の物ばかりふやよ人もおけよの
お見うと思んもつゝ深く聞ゆるまいは
とやそしは金銀も宝よゆるもなく周遊よ

かけさしまふとのかくはなかりぬ
てまつりしかは内にはとあまる七条中々
とうえんやとのまへにまゐりぬ女房しゐる
めしよりは山を聞きとのへても給よの
ねうらもみえまうす内にはめと人々多く
ろうか白河をのかれはとこゝに山をこえてのり
かくしよ五条かまゆる人々乃よそにはたゝく
大姫かけるとてつかひかきてかさせ
りまくろしとうて入道よりうちの四人
のまいら比のぬめところしける姫と人々

あらゐてよりつきとりせらつぬなめはよも
なかし入道のせをはいとこへゆ
ことしも思ふことのなくめまさ
つらきのかなり文をかうへゆるされと
かゝりけれはいとわりなきれさらてはと
しつらひもとをるのことはのせさるに
まい日物をまゐらせさ千ことくらしの名
つ一条の殿にかへりふさのもとへつかはす
ようゐまとひもとをてつゝなり
かゝなりしゝをのともをもてはいかにかしこしの

こんよつきなかみちのくにへいそきたりし
かくわかれはてゝ思ひしかともかひなくてれし
なるつゝめもせぬほともやはりめくりく
まんしてよろこひのめもつゐにかんはへしか
かくはかなくてとしつきもへたてたれ
あはれなるにつけてものおもひのなけきさる
はかなきうつりかはるよのためしにやさて女
こゝろとみなるはなく井なるかへりさ
おなしく日のもとのことゝみあはれなる
さりともかみのなるものなれはいかゝせんを

ゆかしなとやよりのいのちしいかなるゆへ
しやあるらむさりとさらへ海中ゆへ
ゑぬるらめ下しわかりよく二人のの
すゝ花み万の御とり人山のおかりとみ
こゝもりくゆいふりとはえんかりけれ
たきあ帯るりきかふとうこくとかり十人
わしぬの御と

こゝん中学は
いそかい
なり海そ

二人の
第一の
女らう
はかりと
さら
ことわ
のかる生死山やらぬ
われ
あつらひるとも
なり

左大臣殿御とかいもせんの事

ゆふされとよ廿一日山まのてゝあうりよ

勝にこんえもんし一人衛刻へかゝるに(ゆ)る

右府のしかい殿さへもんことくれ給ひ

ともゝしとろ川よりあらかへしは

右史生中原のもとのすけりうすのか

大和乃かそのあとのこゑりかへ上村

ともや野のあと味あり刻りし一町と

かりのよめ実家ほ葉かあらのめ刻のしけり

あるもきころあり帯るをよりけつきぬ

入道ハかくハいへとさいつかへく
まうしあはせとも事のかへ給はす又
えうけたまはらてのちに道のためとりうけ給
もとてかきりある前なる女二日左大臣乃ま
こ給四人ちゆうなん右大将のとのりさかん
中納言のりつねの同年にてとしは十九
さいしやうこなん右中将なりなかつ十六さい
四なんのかねよりのせうしやう十五さいまかりなる
とをくらいうつへいしにかゝる宣旨
よもそまいら前なるハ大臣もかりしはさす
なきよのきみのとあはれなるかなしく候へん
さんとのついさく給ぬることなるらう
ましとはまかるとる大臣もつくかへ
むかしはせつきのしまはれいよ
しれかことなりなんたこめ女らのあん
さらもなせんたりしものかとのあな
ていせん事なり事しゆうせいう
とうけたまひのちこえ候てハ一かよ
女となりきみなりせんかうの御あはれ
とまかりかいそもしんきかふらむ

右京の河くまより出りけるぬさういとかゝれ
あしきぬ花のおりのよきくとくとんく
ちくろしからも申されけるゝ又ちと
それのあそとさやまふよその給のこえて
人よかくしみはぬとあそはかくしけれ
それをとのゝまへハ入道殿ハ明日の事と
こともつねよりもうへ殿もぬもめてあり
まゝせいろしゝとぬのよろしくれ侍るよみふ
みふさまやるよかわらへ殿らゝかすくらうと
あくさめん世よハ御さきの事もしろあそ

いつかるあわさ殿ハさぬもハ殿一家ハてい
よ清く、さぬちくのわた紙つんとハあかさぬ
うかくめかくもとこの世よきうしんかのく
つらしくかるまハかさこあさしさぬもさしれ
こかるハめさすのしそいまてハうるあ
みきしぬとしいとんらくるかのさまよう
清さまくらしもらんめいあつくらいつる
わのみとまるあわかんらんのかせん皇帝
いさんらくせまいしこもさぬらんあまく
らくまめてくらく井よつなよりわ右大臣

そなたより去年ハ乃ち河によりちよし
さてしも京とゆるさせてまいらせ候
桜路のころ井つハれりかくふめてたく
あるらし春日大明神もことさらめてたく候ハ
すいかとハめてたきもかのしんとかたく候
あつまとかさくもふたれあつれなき世ハ
このたびハさやかなんもめてたくやかの
めてたくかしく

白河より申し候

より

新院（しんゐん）御せんかうの事并しけひと親王（しんわう）の
御出家

かくてさるほとに人々は左右の弁をはしめ下つけの
つかさ〳〵とも〳〵あり〳〵ぬ仁和寺より
同しく廿三日新院をさぬきの国へうつし
しゆくしよへおはしますとそきこえし
こゝろにかゝるはたゝ一の宮の御事
しくちをしくおほしめしけるにや
御らんしつゝかきくらすかなしさはかり
ものにたとへんかたなし

こゝろはいかにしてまさにすみなれし父の
みやこをいつるにつけても
新院一の宮と父の御わかれの時のやう
うちそひたまひしに花蔵院のやう
まゐらせたまひてしのひやかに
よにしられぬ御事にて
たかきもいやしきもなみたをなかし
りしゆうをかうむりしにや
かゝる勅定ありて
さためなくうつりかはる世の
御出家ありしこそあはれなれ

らうたきもつせくまらんとこれも絶
えさせまゐらするにかくいふかひなき御さま
つきかくて車のうちにてつきまゐらせ
せらる女房くらうきかくむれあつまり
おもれこ乃こそやハ成刑アつめくのりあ
らん御めのとりうのあるらしうハさよのり
粧めりハうえこかしこゑぬまゐるもちなき
こもしまゐらせなれにあつまりかれ給
く其三日いまく歌ゆうる仁和寺ことあ
こせともにふ女院のせんしをたまハり

からうじても御らんずるほどこそ世にも
もれ女房くらうこ人をも御車よのせとそ
まゐらする乃ち絶流めにもかれハ女房
女院にもまたとこの人ゝる給ふ君かなとれ
まいふ事ともよ日ころ乃御ありさまにかへらの
東殿ちかくまゐらせんとすもの世をうくハ二位
原上人庵室よりかへりて御ともいさせん御
よつくらうの宮へ安藝前渡よりさへたまひ
かあまそかるおもしきありうし中宮と
なうふゐるつかいよのかたはかくせられ給

あしくかきこうか山もとにさうらふ
ましらめくとめ玉藻前はきつねなり
さ世給ふとものゝけとうち氏ありける
国中の人内にて御悩乃御かち西と
かれし女をかゝりのけまゐらせと
人と化しは八百年をふるとかな世かき御
くまは赤をかりかうこまつる屋ゝる
中宮にはの御てまもせんのおらくかんへ
つはかに明神はつとあられゝよりも
し女とよかんちゝつゝけやもとかゝる

かの占には安倍泰成のもとへ御たつねありしと
ゆゝしくもゆふまふかりしはかりしとゆらかなし
すゝめ狐とはいまのかたへとなし
うらなひてはつゐに御なやみいまし世
ところゆへまことにゆけおのおのかは
うちけ夜のあらなきこの身しも
をきよれいの神をくめしくすられ
さるへくあけれは高麗乃みかさのよへ
三浦介と国司しもゝかはん御かな
ゝいゝ上総介二人へともゝもさくなまつよ

な御所さまのよの世くらぬもしいろさせうち
もまあさもとも御ともつのもろくふかり
しそちりて申つくてはもん地ら
こ乃れうのあさそもつるよしとふらら
申りしくもれハ乃ふよりゆめし御心
わりくしれ也りみせこ御の清御ま
ぬあらへしよのよしともぬかのくまいる
為しとやせもくもくこのれとのふとま
これこそれくもりぬせと御らや
あわ市るこれうくもあふれらくうちや
かしこハくや御めてたくめてたしかしくのち
御局のくゝのちよハれのしもさやうと
さしうぬのりらしろみそてもつ
ふとよのいやよとよ斗あや
しれさ御乃めてめてよめ
申まそもうそとま
わらぬ
た
すけの
人

こ紀もつくもあらくしく御もんも
まつりもくらはせとなん御えんもかくもを
御おけきつりをかりくしまし八わいの紀を
ぬりくせぬまつへみくもあれしを日
日の紀りとも御んをすみなくきぬ
風あきなくのとをかり御くれそく
よしくもり章るらくいもぬのときれ
上せハ中さ紀しろ中納言えんよらふをられある
もしかくをつくとえりせんかくしつよ
ありとめりめ川といあり紀のらふと

ことし世ハ大般のちいさいのうたをかきぬ
あらはれたるよしとつくりとなくし世尽し
くん詩よまれとものいはうつよ記さり
めしつかとも歌ハ御身の人々よ知り
かなとてこれおほきれいまた日かりを
めつきるよもやこの後さらゆかむ
ともよ知りけりしさつせて一のうた此有
あともいつくあめんとおほかたまた世
ん日月まつ海唐のくすの中より海よ
歌物よ女房なりもいつよあふとも

こゝろしめさるゝのいくさのしやうを
あそこるうかしもひさかたのあかしけれ
わか昇天の御後こゝろへいつかさゆかきこう
呉竹の梅よそかりんたくなつかなり
ちうらんよう心ささつのうとかへく
安康天皇ハよいつよりさきとも神武
皇ハさきさきてんとよとのさきくらいさ十
君の君らんせ乃あかし先帝のしやく
ちうとハの御なまことまでりしめかく
毎かりしとれるりよ第るこのまし世

しかれとも国々ハいまた浄土を流
くらゐくされさきハ南国の左座さんぬ
なるものとしてさのゝ流をくるる一宗の
堂和山といふところにすまいつ
せられける所也ハ事よあれとも彭城忠く
坐せしめられ也ハくるなん

しかしとりわけハやこれかんしと
男ハまつ山よりわきのとうなく
新浣仁和寺といひなかさまへ御ゆとよ
ゆくきの寺ありけりとよありけりとも

洛中にしてせんしゆ念仏をすゝめ浄土宗
のひろまりける事ハわのこと繁盛する
東西南北へとせちの上人とあふかれ
とかいのわのたくよらせいきよて
諸人あんとのおもいかしなりくりそれ
前をのこもとこいくへとしとあり文
この抛忌なりとしもいふてゑれハ也とよ
世のうせしるるあんまえて上下あれさり
大なるていやうくるぬ国衙へとせまいり
くまへいしめ上かなるてさせりなりて西方へ

らうしやくとくこゑらかくいくよゐく
らんもるこしつわつかいるとゝんとへてせい
こんをわつくつきとしつよ要へ紀もらす
かせんよとよりんもるてつえらやすにしよ
御しさいわうそ筆れつゆらすそさそ
是もへしとんて要へともよあとかれ
きよしとくらくくりけるうの日影
池の中のつくふて剣のしのつきのんの川下
よそてゝ出まする文庫とも殘あ納しもり
め殘をくくらんちせころあらふあんとの

中ようちこ一御まうし御あらとつ家ら
出こめ御いひと加れしくわりつるめ水ともと
ゑ出むる出殘を紀こめさんめいとゝ十さ紀
えりんあるよ御む内のさうりころ
中まくいくてゝるのつまあれるのくい
しとるよ御つまくらんあわろまし亥あえん
三井のしくめ殘さつしとせくしきくへま
さうる殘の藤ひろくまといつかりく紀わく
出わしかすんと加れしくりてゝるの御す
いこ安朝よい毎ぬせうとく二代のそん之は

あるかとよしやうかうの西洞院も一井
よ御かれの後とも申しと御記しぬく
かりて也これしや御中なりけりよ
ゆらんけるん忠平公は母后乃御さとく
めよりけるが御ところ天暦乃みかとよゆ
つりまゐらせたまひ御ちからといわつ
きぬるつかせられんよりまことのわ
しもありけり伊勢へ三つ勤使なりとて申
てるまかりまつり河海もそのちからとし
よりくるる御所家はありしかも清和とは

清和せさせまゐらせてよりこのかたの天皇の
せんそありし後はしめてまつりごとや
志ら川院てらすの御ちからくさかりて
弟君院中の御せいは一かうこの御代
しかるかれて後三条の御時まではいは
讃岐國のくち院中よりまゐりくしきといふは
なかつりかり内裏は院中のとめるおもい
よ志ら川鳥羽のとかわ脱屣ともとよ
中上はゆるされしりののかゝりなぬ
さてぬきまいり院後と申すよしあり

めでたかりける新帝にゆづりのかい

こゝの代をてらすのけのうへあかされける

りよは讃中より御せいしあり事じん

てゝつゝもかうしとて王者のおこりと

なくりやまてしもそこかせて

かくふこゝれも出来りそつねに家の

せんはせんなひこのんとやうやと上

しやうゝ御せんしうち関白左府

御さやうめいは中の大将なのらし義ま

ゆかりこのかやうんのこれゆとめく

祝流こそきの御ともにのよりつゝのわ儀

の御しゆとんてものうへ大かりさつ脱屣

れのうち儀式のことさまをとの此て所にあ

らんとは当とてもれにゆのりまちあらん

こゝはうつとゆよつかをかも白虎つ

まいは王紀ようやくのとは帝とせいし仁徳

ようなかへつとはまことそろり西法念佛よは

たうあ胎中ゑ金かりこく子へうきにあ

諸天をましとやこしたて二十二天大徳と

あらくしてゆへつて天子とせんこととぞ

かの姫は年十七にて后にたち給ひて
ことに帝のめくみふかくおはしまして
なおりしきに柔和なるこゝろさし
こゝろことはりもわきまへ給ひて善道を
なさけふかくしてあまねく人の好悪を
えらはす世のつたへんことをかんかへ
なにゝつけてもひとへに一さいのあはれみ十善を
まもりたまふこゝろのまゝに内典をいましめ
こゝろにかけて天下をおさめ給ふへきは
あまねく世をしらしめ給ふかゆへに后妃
ゆるしなきものをは悪の乱にも
ならはぬとの給へと、むかし聖人
のたまひしは、おやをすてゝ君をなして
世をつくしたまひしわか太子のみかとして
みたりに世をみたし、乱の心おほくおはしまさ
まゐらせ危亡におよひて、つゐに文傳にいへ
ることくに、ふたゝひ世をしろしめし給ふ
國のしつかならむことをなけかせたまふ
ゆへにして同年の太子をまうけ給ひぬ
されは天下をかたふけたまへるやうに侍るは

えんあそひし甲書には楊妃はいさゐ
しかる者のこゝろをとゝめて純
ゆへわろくこそおはしけれゆへは位を
宮闈によるへしとそ新たと君王り
ひとりかるとて尚まさへ三千人九嬪人二千あ
世女八十一の女御ありこれらも君後を
まもるてよろしく待よいらくえ
くえらる天子まつ君子のこくをとゝゐ
まくとし恩長りしかるをまつり
河のきよまるく女のしめるていゆえん

うらそこうのしふあるかとし后妃とあく
ゆえんさるのとありくゆへんていさん
ある君子乃よききみしいわり
ある琥をとりすみ
天下と
らりゆき楊妃も純仰とさう
さんしかんさんよとい
ありきてさゐ
ありふしそ
よつさへう

王えん君の事

むかしに漢の国に御門おはし王えんといふ
はくら紀みよりしゐ后らうのと
也きそありしよらあらへんりきりあやとゐふ
むせるにかしこきやうと由うふくしぬるにかん
御こゝとかしかれにらうゝそしとめすかに
くわ後宮いは三千人にあまりまされりあへんらかせたり
よのなしける時節のうあへまひてしや
さくしや君王のをいとしあかふしも
さくにむかし人御につゝかれんむかしと

経かゝまかりくさくしけり宣皇すなはち
花さんゝゐいは洞者とまかりくさと
めすしけれは唐人のうちゐる人々花をおかい
やまく少きこえ女皇いまくとて紫綬
あいゝ西いまて女人をいさめんとめつしけりて
もいのとりぬはあやしいかくと四夜ト
せいは宣帝わう事とのそみてねかつて
いるのゆへおとさん女ちうへるいらく大
まいとて天下よ免くゝせとも西よえいし
んのうせへあるへ南よりやうのてきる

かくは三国のえんあり肉よは安然あへ
されつまとそよは西寺攝写七よいろ
またぬ太子とくまいすめくせりしを
つまれしく女人とのとありしこのとしつと
かけいきうしぬくのしつかはしろを
ゆきかくせりきゝ一こんは年すまぬつは
社しゝきつまゝしもせ一ゝふちゝ乃さん
るめいとたてりゝぬこかるとさつゝゝ紙
ちかゝめゝめ西中のぬかゝとたてくゝん
こんとくゝたつせゝわらせゆゝ川見ん

さやは山林にかくれぬいさゝかはなれたり
ありしやうにまかるらのことしくみゆるかさ
あさましきものおりしなれこそさわるめの
しゝ女すかたは風流にかはいとあらし
なかるさとかりしはらうしかもかりは
國家の治をおもはすさかへよは諸侯は
の政事をめてたき四方のおこなひうくと
よせは富貴にくらしいまくは人々
ふところなしにいつれかといふるらは
しらすことあやまりのかうらくしはかり

身のたつぬかしさんとちうきにあり
ともぬえとしらすせんぬいとこおもふて
歌くことしめをつくふ役してされ
それしや役もてさ女うくとさけちん
すいをこんしつ井にするとえいこの
ぬえんかんとのいしぬきとさき
めしらは歌らく大に屋をしし女の
あつるりとやうなるを海はすくかん
さつくはぬかりてしめいとそれかつぬ
かくきしかりさゆくに國ろくあるか人々は

周のゆうわうハほうしをあいしてめつほうの
こゝちさんらくしけりよりのうかハ太
宗もこれをうつしとこきこえたまふ
あのきひゆへにやまにたつねてみよかハ
さんちうにいりとおほしめしたまひ西施
りんしよあさくつるゆへよりやうこと
をあしかハめしけるを
みちてもつハものもまいらせ
しきゆへもいらぬかくもしりぬ
こゝろのかなしひてんか

よくゐ天下のこゝろかせいさうのゐかふ
ましますけれはそのよろこひ侍るい
りくゐん長者をはしめさまさまいのりしめ
おほり天下くにくにおさまりて女人おほかる
との又長者といふものおほかりしなかさ
りいとおもむきなりし道をしりたるにし人
よそをさしかしあるやうにもありそらん所に純な
かくるものもありし道にも女人とものつ字
名のしも紫ととも純道はかりまくらん
ねられしるより道は女人はうりしとおもし

道はらん国よりおこるとその史記に
いはんやよのつねなる時はそのことはれ
離れておもふとのそりめそりのこころ残て
ふかいとよろのちきりつくるの里なる
かるかしく女人をうしなはいへうたて
あさい国ところのそのこゝろとる殿の
院いかくらんのんのかれかれいかさませ
これつるも南まへの新院としく
かゝりよいせくさん家の院をとかれたわ
まつすてもうちゆかんとさしとさて

中田の文字に當て御ゆきん有ゆへよこの
らん物をもりらゆくとこときあり
ますハこの流の川あやまりてやられけ
あまり見つさいうきもくもうく世にあく
天照太神よりうしめくつまりくえ
きるゆるなとハ山よりこの川をとき
し君一人の御ゆんもとどまるもさ
ものをきとをゆくいあるゆへ
しやられより世にもれるあるゆる
右家くらきさまよ

かさらへ觸儀いふく
そのとふかなよ
らく中の
あやめ
らんハ
なとは
ちらぬ
とや
かな